

# 映像メディアにおける 「民俗」の表象とその受容

石川県鳳至郡門前町七浦地区を中心として

Representation of "Folkway" on Television  
and Reception by Represented People

川村清志

はじめに

- ①映像メディアと「民俗」
- ②番組の中の「民俗」と「地域」
- ③捨象された「現実」への視点
- ④映像メディアの受容と相互交渉の中の表象

おわりに

## 【論文要旨】

本稿は、映像メディアにおける「民俗」の表象と受容について議論し、「民俗メディア論」への視座を構築するための予備的な作業を行うことを目的としている。ここでの議論は大きく分けて4つの手順を踏むことになる。

まず、「民俗」の錯綜状況を理解するために、地域の祭りや生業を取材した、あるテレビ番組に焦点をあてる。番組で表象される「民俗的なもの」についての検証を行うことで、そこでの表象の修辞法と現地との乖離を指摘する。これらの記述は、「民俗」を継承しているはずの地域社会が、現代のメディア網の直中に配置されている状況を明確にするだろう。次に地域を自立的な固有のシステムとみなす基本的な視座に異議を唱える。それらが民俗学的なまなざしと根深い共犯関係にあることを考慮しつつ、それとは別の視点を示唆する糸口として、これまでの地域社会の表象からは捨象されてきた地域外部との有機的な結びつきや、そこでの重層的な経験を統合していく主体の柔軟性に注目する。

そのうえで地域の人々による映像メディア（やその取材）の「受容」の問題について考えていく。ここでいう「受容」とは、番組の視聴率やその全体的な評価を意味しない。そこにはすでに番組を一貫した作品として固定し、情報がどの程度「正確に」伝達されているかを確定しようとする視点が内在している。むしろ、彼らの生活の一面で享受される番組のあり方や、日常的な会話やうわさのレベルで浮上する番組の位置付けに注目する。最後に、より今日的な課題として、マスメディアと地域との相互交渉の問題に注目する。そこでは地域の側が発信するインターネットの中での「民俗」の生成を指摘しつつ、それらとマスメディアとの重層的な関係性について検証していきたい。キーワード：映像メディア、民俗表象、受容、交渉、インターネット

## はじめに

今日、「民俗」ないし「民俗的なもの」は、繰り返し再生産され、日常生活の中に氾濫している。多くの場合、「民俗文化財」という修飾詞が付帯する「民俗芸能」や「祭礼行事」、「風土」や「日本の四季」を強調する際に持ち出される棚田や伝統漁、あるいはそれらに付随する「あえのこと」などの農耕儀礼や「ナマハゲ」のような来訪神儀礼、さらには合掌造りなどに代表される民家といろり端の風景。それらは、新聞、雑誌のグラビア、観光案内のパンフレット、ニュース番組や映像フィルムを通じて、——都市と地方の差もなく——人々に喚起されつづけている<sup>(1)</sup>。

このことは「民俗」を表象する中心的なメディアが、大学でも博物館でもなく、まして、研究者が記す学術雑誌でもないことを如実に示している。一般の人々にとって、「民俗的なもの」に接する機会の大半は、テレビを中心としたマスメディアを通してであるといっても過言ではない。そのような状況の中で本稿は、映像メディアにおける「民俗」の表象と受容について議論し、「民俗メディア論」への視座を構築するための予備的な作業を行うことを目的としている。

### ①……………映像メディアと「民俗」

これまで民俗学が映像の問題を正面から扱う機会は、きわめて限定されていた。「民俗」に関する映像を解釈し、批評することはもちろん、映像技術をフィールドワークの有効な手段として用いるための方法論さえ、断片的に言及されてきたにすぎない。このことをうら返せば、民俗学自体の流通と認知過程が、もっぱら文字媒体によったものであり、そのような視座から「民俗」を対象化してきた経緯が透けてみえる。

しかし、ようやく近年になって、民俗学においても映像への関心が高まってきたかにみえる。先駆的に行われてきた、一部の映像作家や研究者による「民俗映像」についての提言や実践が改めて議論の俎上にのぼり、民俗学者が関与する映像も（主に）公的な機関の要請から制作されつつある<sup>(2)</sup>。しかしながら、これらの営為は、映像を巡る問題系の一面に偏っていることも否定できない。民俗学における議論の多くは、映像の資料化や編集方法、記録方法やその扱い方といった技術論、あるいは民俗映像の製作論へと向かいがちであった。確かにそれらの議論自体も、いまだ端緒についたばかりで、多くの実践と熟考が必要とされる。

だが、それらが一部の自治体や博物館内部での課題として終始している限り、映像メディアを巡る議論の展開は望めない。すでに述べたように「民俗的なもの」は、繰り返しテレビを中心としたマスメディアによって再生産されている<sup>(3)</sup>。このような状況の重要性を最初に指摘した民俗学者は、坪井洋文であった。彼は、一般の人々が『新日本紀行』というNHKの番組を通して、日本の各地域の慣習や伝承を理解し、語り合うことが可能になったと指摘していた[坪井 1986]。このことはテレビ番組が、「民俗」を日本という時空間の中に再編し、人々が受容する素地を作り出していたことを示唆している<sup>(4)</sup>。しかし、マスメディアの映像を通しての「民俗」の受容と消費、それらについての解釈、さらには映像化された地域への影響について、その後の民俗学が何らかの解答を用意

した徴候は、管見の限り見出しえない。<sup>(5)</sup>

すでに社会学やメディア論においては繰り返し議論されてきた点だが、新たなメディアの登場は、それを受容する身体との関係性や思考の枠組みそのものを別の形態に組み替えてきた。メディアとは、決して、単なる伝達手段や経路、あるいは表象の形式に留まらない。それらは表象される内容とそれを受け取る身体に影響を与え、認識のあり方、思考体系そのものを変換していく。<sup>(6)</sup>

当然、「民俗」や「伝承」として表象されてきた様々な範疇もその例外ではない。それらが、文字を媒体として、あるいは印刷物を媒体として表象されていたときと、映像メディアを媒体とするときとは全く異なった位相に属している。写真に収められ、映像化される過程で「民俗」自体が、不可逆的な変容を遂げているといえる。すなわち、「民俗」の当事者やそれを享受する人々を含みこんだ社会的な関係性が、映像メディアを通じて新たに再編成されていると捉えることができるのである。

私は、これに先立つ論考で、「ふるさと」の「伝承」を表象する映像メディアを対象として、その問題点を指摘した。<sup>(7)</sup>そこでは、番組で紹介された生業や儀礼の、個々の地域社会での文脈は看過され、「奥能登」という静態的で均質なイメージが付与されていた。しかも、映像による再文脈化に際しては、民俗学的なイデオムである「祖霊」や「まれびと」の観念が流用されている。その一方で個々の地域社会は、各々の生業によって成立している自立的で完結した社会として描き出されていることが明らかになった。それは、今日の地域社会が抱える過疎化や高齢化の問題、さらには地域社会と外部との関係性を捨象することによって成立していたと考えられる【川村 1996】。

だが、このような表象技法に関する批判だけでは、おそらく不十分である。すでに指摘したようにテレビによる「民俗的なもの」の表象は、その当事者によっても享受され、様々な影響を与えたり解釈の資源となったりするからである。むしろ、映像メディアのフィードバック状況をも考慮した議論が、ここでは必要とされてくる。これらの手順を踏まえたときに初めて民俗学は、「現在」のフィールドと正面から向き合っていくことが可能となるだろう。

以上から本稿では、先に提示した映像メディアの表象とその受容という二重の問題を調査地の具体的な事例をもとに考察していく。そこでは、あるテレビ番組において地域を表象する際の修辞法を明らかにしたうえで、民俗誌記述が目指すべき方向性とその分析の足がかりを模索する。次にメディア網の直中にある地域社会を民俗学的な営為によって、どのように対象化するのかという問題について考えていく。そこでは、映像の「受容」におけるプリコラージュ的な側面を提示するとともに地域の側の新たな対応のあり方を提示することで、その相互的な交渉過程を主題化したいと考えている。

よって、次節では「民俗」の錯綜状況を理解するために、地域の祭りや生業を取材したあるテレビ番組に焦点をあてる。番組で表象される「民俗的なもの」についての検証を行うことで、そこでの表象の修辞法と現地との乖離を指摘する。すなわち、番組で紹介された風向きの説明、村祭りの映像化、人々の描き方について、フィールドワークに基づいた事例と照応しつつ、それらが民俗学的なイデオムと同型であることを確認する。これらの記述は、「民俗」を継承しているはずの地域社会が、現代のメディア網の直中に配置されている状況を明確にするだろう。

3節では、地域を自立的な固有のシステムとみなす視座に異議を唱える。それらが民俗学的なま

なざしと根深い共犯関係にあることを考慮しつつ、それとは別の視点を示唆する糸口として、これまでの地域社会の表象からは捨象されてきた地域外部との有機的な結びつきや、そこでの様々な経験を統合していく主体の柔軟性に注目する。

ここで紹介するのは、番組にも登場した一人の老漁師の生活史と、彼の「民俗知」についてのエッセイである。彼は、自らが生まれた場所で生活し、その風土と調和してきた人物として描かれていた。だが、このようなイメージは、彼の生活史を考慮したとき、きわめて一面的であることが理解できるだろう。けれども、そこで描き出されるティピカルな「村の古老」イメージは、まさに民俗学が長く保持しつづけてきた「良きインフォーマント」像に他ならない。多くの場合、民俗学では、個々人の経験や資質は「伝承」という観念に還元され、そこに適合的でないと措定される事例は排除されてきた。

4節では、そのような地域の人々による映像メディア（やその取材）の「受容」の問題について考えていく。ここでいう「受容」とは、番組の視聴率やその全体的な評価を意味しない。そこにはすでに番組を一貫した作品として固定し、情報がどの程度「正確に」伝達されているかを確定しようとする視点が内在している。むしろ、彼らの生活の一局面で享受される番組のあり方や、日常的な会話やうわさのレベルで浮上する番組の位置づけに注目する。番組のメッセージと享受する立場とのズレや、選択された情報の振幅を明らかにしたいからである。

以上の議論を踏まえたうえで、より今日的な課題としてマスメディアと地域との相互交渉の問題に注目する。そこでは地域の側が発信するインターネットの中での「民俗」の生成を指摘しつつ、それらとマスメディアとの重層的な関係性について検証していきたい。

## ②……………番組の中の「民俗」と「地域」

ここで紹介するのは、1997年の12月13日にNHK中部放送で放映された「中部発 見たい会いたい、奥能登に冬再び——重油の海を越えて」である。

表題からもわかるように、この番組の主旨は、タンカーからの重油流出（1997年1月）のために被害を受けた能登半島の近況を伝えることにある。ただ、重油の被害状況やその撤去作業の様子は一切示されず、人々の生活がいかに以前と同様に営まれているかを示すことに主眼がおかれている。番組に登場するのは、能登半島の外浦に位置する<sup>ふげし</sup>鳳至郡門前町と<sup>とぎ</sup>富来町の海岸部に位置する3つの漁村である。写真家の橋口讓二氏が、実際にそれらの地域を訪れ、そこに暮らす人々にインタビューを行いつつ、行事や生業を紹介するという形で番組は進行していく。

この番組の全体の構成は、表1に示してある。導入部として奥能登沿岸が重油の被害にあったことが伝えられた後、実際に地域を訪れる写真家の橋口讓二氏のプロフィールが、彼の写真集を交えて紹介される。それに続き、門前町<sup>いぎす</sup>五十洲の間垣が倒れた出来事を中心に区長のインタビューと祭りの様子（7分22秒）、次に同町深見地区のイシル作りとそれを続

表1 「中部発 見たい会いたい、奥能登に冬再び——重油の海を越えて」放送内容

	内容	時間
導入部		3:10
門前町	風とマガキ	5:32
五十洲地区	冬の例祭	1:50
門前町深見	イシル	5:50
富来町	岩のり漁	9:58
結語		1:40

ける山本さんへのインタビュー（5分50秒）、最後に富来町の岩のり漁が紹介される（9分58秒）。行事や生業に関しては、ナレーションが情景描写と意味付けを行い、橋口氏が簡潔なコメントでまとめている。

最初に断っておくが、これらの映像は、いわゆる学術的な目的のために製作されたものでは決していない。また、番組の中で各々の生業や行事についての「民俗学」的な説明が行われたわけでもない。よって、この番組自体に厳密な民俗学的な概念や方法論が適用されていないからといって単純に批判するわけにはいかない。また、エピソードの合間に挿入されるカメラマンの橋口氏の短いコメントは、地域社会を考える上でも示唆にとみ、貴重な視点を提供していることも確かである。

例えば、彼は、五十洲でのインタビューを締めくくる形で次のように述べる。「ぼくらはついつい発展とか、その過疎化とか、数だけ見ていくけど、そうじゃなくして、その、この入り江っていうか、この土地がもつ、育める大ききさってあるような気がしますね。」ここで彼が用いる「過疎」という言葉には留保が必要だが、人々がそこに生き続け、生活の舞台である「土地」を見つめる視点を橋口氏が表明していることは間違いない。

しかしながら、このような「土地」に根ざした人々の暮らしを求めようとするまなざしそのものが、不可避免的に地域の現実から乖離していく事態は、はっきりと主題化すべきであると考え。そこで以下では、番組全体については言及せず、私の調査地であるふげし鳳至郡しつら前町七浦地区の五十洲(8)についての事例を検証することにする。以下で確認しておきたいのは、この民俗映像に用いられているレトリック修辞法の問題である。五十洲の放送分に限定しても、おおよそ3つの問題点を指摘することができる。

まず、強風のために倒れた「間垣」のエピソードからみていこう。「間垣」とは、能登の外浦地方に特徴的にみられる竹によって作られた防風壁のことである。映像は、荒れ狂う日本海の荒波とそれらが堤防付近に打ち寄せるシーンから始まる。ナレーションの「能登の人々は沖から突然襲ってくる風をヨリと呼んで怖れてきました」という注釈に続いて、倒れた間垣を起こそうとする場面が映される。このエピソードは、「風速37メートルの突風に見舞われた」日の出来事として、能登の厳しい自然の中で暮らしていく人々の生活を示すものとして描き出されていた。

問題は、ナレーションの説明にある「沖から突然襲ってくる風」である。放送では注意しないとわからないが、間垣が倒れた向こう側には荒れる海がのぞいている（写真1）。つまり、間垣は、「沖からの突風」で倒れたのではなく、「沖への突風」によって倒れたのである。このことは、放送全体からはそれほど大きな問題ではないかもしれない。だが、あたかも民俗語彙のように用いられている「ヨリ」という言葉や風向きなどについての説明が、その土地の自然知と乖離していることは十分に問題となる。本来、このような風



写真1 五十洲、沖への突風によって倒れた間垣とそれを修理する人達

に関する語句は、地域ごと、また、個人によっても様々な変異があり、慎重な調査が必要となる。

五十洲において複数の漁師に質問すると、各々が語る風の名称や向きには微妙なばらつきがあった。それでも、それらの語りに共通する点をまとめると、おおよそ図1のように図式化することが可能となる。一覧すればわかるが、ここに「ヨリ」という民俗語彙は存在しない。むしろ、七浦で典型的に海が荒れる風はクダリであり、皆月湾の沖から吹く(西よりの)風は、タバカチと呼ばれている。また、海が荒れる兆候として、アイからクダリへと変わる過程に風が四方に舞う現象をシカタの風が吹くと表現される。さらに、五十洲では、背後の谷から吹き降ろしてくる東南東の風をヤスクダリと呼んでいる。間垣が倒れたこの日も、風の向きから「ヤスクダリの強い風にやられた」という説明がなされていた。

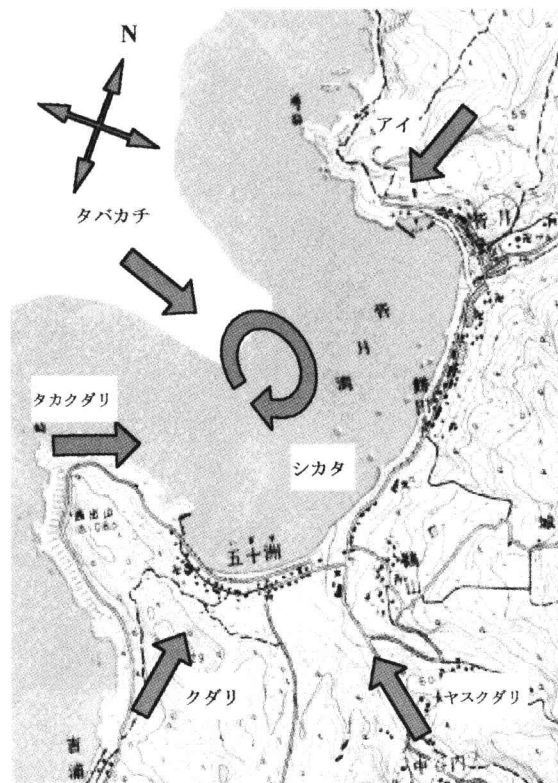


図1 門前町七浦地区における風の向きと呼称

よって、ナレーションによる風の説明は、五十洲という村落レベルの民俗知に照らし合わせたときには、大きく逸脱していると言わざるを得ないのである。土地に固有の民俗知を無視することは、地域の「風土」や「厳しい自然」を強調する番組の修辞法とは明らかに矛盾している。逆にいえば、これらの言明が、いかに観念的な言明であるかが確認できる。

次に紹介されるのが、間垣の補修を行う五十洲の区長米澤孝次さんの姿である。間垣は「風を遮断するのではなく、しなやかな竹で風を和らげ、受け入れる」存在として、「風と共存していくための知恵」と位置づけられる。間垣は環境と融和した慣習的な生活の知識を具現化するものに他ならない。続いて米澤さんの家で橋口氏とのインタビューの様子が映しだされる。「海が荒れる冬の間は月に数えるほどしか漁に出ることができません。小学校4年の時から漁をしてきた米澤孝次さんも、家の中で海が凪ぐ日をじっと待つ生活をずっと送ります」とナレーションが入り、米澤さんの漁師として側面が強調される。同時に橋口氏が「米澤さんたちが代々ここにいらっしゃる、理由」に関して質問し、それに対して米澤さんは、「やっぱりよそいったって、それ、わしら、やっぱり海が気にかかってね、海しか仕事できんちゅう頭あるけんね」と答えてもいた(表2参照)。

これらのやり取りをみたととき、生まれた土地に根ざした生活に育まれ、その環境と寄り添うようにして生きている地域の人々の典型として、米澤さんは立ち現れてくる。確かにそのような面を私は否定しない。70歳を過ぎてもテング網という小型の定置網をさし、元気に漁を続ける米澤さんをそのように表象することは、決して間違いではない。彼はまた漁場の細かな名称、先ほども述べ

表2 「中部発 見たい会いたい：奥能登に冬再び——重油の海を越えて」〈五十洲地区放送分抜粋〉

<p>(皆月から五十洲にかけての海岸線と集落の様子を上方から映していく)</p> <p>ナレーション：海岸線に張り付くように転々と連なる能登の集落、冬の間、海沿いの家々では、しばしば、台風並の強風が吹きつけます。①</p> <p>(風が吹きつける防波堤越しの民家の様子)</p> <p>ナレーション：能登の人々は沖から突然襲ってくる風をヨリと呼んで怖れてきました。①</p> <p>(倒された垣根の所に橋口氏が向かう場面)</p> <p>ナレーション：風速37メートルの突風に見舞われたこの日、なぎ倒された垣根を近所の人たちが総出で引き起こそうとしていました。</p> <p>(倒れた垣根の様子)</p> <p>(橋口氏と地元の女性が向かい合って話を聞く場面)</p> <p>橋口氏「こういうことはよくあることですか、そんなにしょっちゅうは」</p> <p>(画面に映っていない男性)「そんなにしょっちゅうはないね」</p> <p>(女性)「しょっちゅうはないね」</p> <p>(垣根を起こすために綱を引っ張る場面)</p> <p>(綱を電線柱に括り付けるところ)(もう一度、綱を引っ張る場面)(海岸に波風が打ち寄せる様子)</p> <p>ナレーション：奥能登の沿岸帯にはマガキと呼ばれる竹でできた風除けの垣根が受け継がれています。</p> <p>(垣根にする竹を運ぶ様子)(竹をマガキに継ぎ足していく様子)</p> <p>ナレーション：潮風にさらされて朽ちていくマガキに毎年少しずつ、新しい竹を継ぎ足して補強しながら、風と波しぶきに備えます。</p> <p>(竹を継ぎ足していく様子のアップ)</p> <p>(橋口氏が米澤さんに海岸沿いでインタビューする場面)</p> <p>橋口氏「単純に労働だけを考えると、ブロック塀の方が、もうずっとと修理もしやすく、すみそうなんですけど、竹との違いというのは」</p> <p>米澤さん「夏になると暑いしね、あの、風通しも悪いし、」(「区長米澤孝次さん」というテロップ)「風もねえ、このくらいの風ならそうでもないけれど、もっとビュービュー吹く風はねえ、あの内側に風が入るんですよね、ブロックの上から、その風が行き場ないもんでねえ、まあ、なかでぐるぐる、ええ」</p> <p>(家の納屋を背景にマガキが風にゆれる様子)</p> <p>ナレーション：風を遮断するのではなく、しなやかな竹で風を和らげ、受け入れるマガキは風と共存していくための知恵なのです。</p> <p>(米澤家の居間、コタツ越しに、橋口氏、米澤さん、邦子さんが座っている様子)</p> <p>ナレーション：海が荒れる冬の間は月に数えるほどしか漁に出ることができません。小学校4年の時から漁をしてきた米澤孝次さんも、家の中で海が風ぐ日をじっと待つ生活をずっと送ります。②</p> <p>(橋口氏の側面)</p> <p>橋口氏「ま、一日しかいませんけど、あの、あの、決して、このま、あの、この村って優しくないでしょ、あの、自然が、あの、風は強いし、海辺あるし、」</p> <p>(米澤さん正面より「米澤孝次さん」というテロップ)</p> <p>米澤さん「いやー、あんた、わしら、これ、これが普通や思とる。まだまだ、すごいって」</p> <p>(カメラがひき、奥さんの邦子さんの横顔「妻・邦子さん」というテロップ)</p> <p>邦子さん「まだまだ、これくらいの風でね。まだまだ、ものすごい日で、」</p> <p>米澤さん「あの、船だまりに船、あれ、うっかりあげんとおいて、ほいで朝行きゃ、船ひっくり返とる」</p> <p>(橋口氏、側面)</p> <p>橋口氏「それでも、その、たとえばこう、米澤さんたちが代々ここにいらっしゃる、理由っていうか・・・」</p> <p>米澤さん「しがみついとる(笑)」</p> <p>(橋口氏と米澤さん)</p> <p>橋口さん「なんなんですよ」</p> <p>米澤さん「やっぱりよそいったって、それ、わしら、やっぱり海が気にかかってね、海しか仕事できんちゅう頭あるけんね、海のなにとこいったって」②</p> <p>邦子さん「都会の生活いやねー、やっぱり田舎の方が・・・」</p> <p>米澤さん、「朝起きて、海、外出て海見るだけで、あっさりするね、心が」②</p> <p>(障子越しに3人が話している場面)</p> <p>(マガキ越しに荒れる五十洲の海の情景)</p> <p>ナレーション：米澤さんはこの1年、重油に汚染されたこの海が回復するのを辛抱強く見守ってきました。ひとたび荒れ狂うと人の命さえ飲み込んでしまう能登の荒海、しかし、その底知れない自然の力が海を再び蘇らせたのです。②</p> <p>(五十洲神社内で神主が太鼓を叩いている様子)</p> <p>ナレーション：この日、米澤さんの住む集落で恒例の冬の祭礼が行われました。</p> <p>(地元の人たちが祈願している様子1,男性)(地元の人たちが祈願している様子2,女性)</p> <p>ナレーション：人々は海の復活に感謝し、豊漁と船の安全を願って祈りを捧げます。</p> <p>(お神酒を入れた鉄鍋の周囲に集まる人々の様子)</p> <p>神事の最後に鉄鍋に沸かしたお神酒で両目をぬぐう風習が伝えられています。</p> <p>(目をぬぐう様子2,男性)(目をぬぐう様子2,女性)</p> <p>激しい波風の中でも、目が良く見えるように、厳しい風土に生きる人々の願いが、込められています。③</p> <p>(橋口さんが写真を取る様子)</p> <p>ナレーション：橋口さんは、厳しい自然に逆らうことなく支えあって暮らす人々を写真に取めました。</p> <p>(橋口さん正面)</p> <p>橋口氏「だから、ぼくらはついつい発展とか、その過疎化とか、数だけで見ていくけど、そうじゃなくして、その、この入り江っていうか、この土地がもつ、育める大ききさってあるような気がしますね。」</p>
---



た風向き、さらには、「イカは波が凧いで、月がよく照るような夜にかかる」や、「カマスは雨が降って川から泥水が流れ込んで、真水と海水が混じって濁ったときに岸による」といった漁にまつわる様々な「民俗知」をも語ってくれる話者である。だが、問題は、米澤さんは単にそのような「村の古老」に留まるような人物ではないということである。

実際、彼は戦後の大半——具体的には昭和34年から同57年まで——、村の外部で外国航路の船員として暮らしていたのである。そのような経歴は番組では一切紹介されない。むしろ、そこで強調されるのは、「小学校4年の時から漁をしてきた」という地元での漁師としての側面である。この問題に関しては、次節でもう少し詳しく取り上げることにしたい。

最後に紹介されるのが——実際の撮影では最初だったのだが——、五十洲の冬の例祭である。最初に拝殿の中での神事が紹介され、その後、拝殿前に設置した鉄鍋でわかしたお神酒で目をぬぐうシーンが映される。ナレーションではこの行為を「激しい波風の中でも目が良く見えるように、厳しい風土に生きる人々の願いが込められています」と意味付けている。

しかし、この映像そのものがテレビ映りを意識して創られたものである。この日、実際に神事が終わった直後に目をぬぐったのは、2人だけであった(写真2, 3参照)。また、拝殿で直会が終わった後も、多くの人たちは歓談を続けていた。ところが、ディレクターの要請を受けた村人が声をかけたことにより、このような映像が成立したのである。何人かに訪ねてみると、毎年、目をぬぐう人もいれば、ぬぐわずに帰る人もかなりいるという。ようするに番組が伝える「人々の願い」は、意図的に創られた映像によってイメージ化された面が強く、現場の状況を忠実に写し取ったものでないことは確かである。

これまで指摘した表象の修辞法は、私が以前に問題を指摘した『ふるさとの伝承』と同じ参照系に支えられていることがわかる。これらの番組では、生業によって支えられ、素朴な民間信仰を継承する、変わることもない地域社会というイメージを、一般へのメッセージとして発信しているのである。しかし、このような表象のあり方は、かつての民俗学が地域を描き出す記述のあり方ときわめて相似的である。例えば、民俗学者の小林忠雄と高桑守史は、能登半島の寄り神信仰を「古代から生き続けたきわめて原始的なユートピア



写真2 五十洲。冬の例祭 お神酒で目をぬぐう村の老人、ただし大半の村人は、この時は拝殿に入っている。



写真3 五十洲の冬の例祭を撮影するNHK



の願望表現」と位置づけ、能登の外浦一帯に伝わるアマメハギや面様年頭などを「マレビト信仰に根ざした行事」と捉えている[小林, 高桑 1973:20~21]。そのうえで彼らは、次のように記している。

そして私たちは、訪れたいいくつかの訪問地で、寄り神信仰の実際に触れるとき、それがはるか古代の神の来訪という意味を、今日まで引き継ぎ、生々しく展開している生きた伝承の意味の深さに驚かされるばかりでなく、そのことの今日的課題を、これほど強く突きつけられたことはなかった。伝承という形式の中で、単に歴史的事実の変遷とは別に、神話を創造してゆく民俗社会の絶えることのないエネルギーが、時間というワクを超えたところで発想される常民社会の原理の礎となり、強く発露されているように思われた[小林, 高桑 1973:26]。

断っておくが小林と高桑は、同じ著書の中で「変わりゆく能登漁村」(4章)と題した一章を設け、産業構造の変化に伴う社会変動について記している。また、最後の章では、「一老漁民のライフ・ストーリー生活史」として村を超えてた主体のあり方を克明に記してもいる。にもかかわらず、そのような事例の冒頭において、近代以後の社会変動を隠蔽する、静態的な地域のイメージが表出されているのである。少なくとも私には、「時間というワクを超えたところで発想される常民社会の原理の礎」というものは全く理解できないし、実際に示された事例とも大きく乖離していると感じざるを得ない。

本稿では、映像メディアが紹介してきた儀礼や生業を、「民俗的なもの」と措定してきた。このことは、それらが民俗誌の項目に含みうる対象であり、民俗学者による報告がすでに存在するという点に留まらない。むしろ、両者に通底する対象への本質主義的なまなざしと、その結果産出される表象の相似性によるのである。

### ③……………捨象された「現実」への視点

映像メディアは「現実」をありのままに示すものではない。前節をそのように整理することは、間違っていないが十分ではない。それは単にカメラの映し出す範囲が限定されており、より多くの「現実」を見落としているという判断への帰着である。ここから得られる結論は、より十全な、そして広範な映像の提示であり、民俗誌の項目を細分もらず記述することへの欲望と同じ網羅主義しか意味しない。

だが、ここでもう一度強調されるべきは次の点である。すなわち、映像は1つの作品として、不可避的に「解釈」を挿入しており、地域社会の現実とは乖離した言説空間において、産出されたものであったということである。そこで用いられるレトリック修辞法は、きれぎれの「現実」を再構成し、ある均質なイメージを生み出すための(9)接着剤として作用していた。しかも、そのための資源の一つとして、間違いなく(かつて)の民俗学は援用されている。このことも研究者は心に留めておく必要があるだろう。

この節では、これらの問題を越えるために、地域社会での別の「現実」の照射を試み、言説空間

を解体するための議論を行いたい。具体的には、番組にも登場した五十洲、米澤さんの生活史の一端と彼自身が記した地域の風についてのエッセイを参考とする。そこからは「民俗映像」が捨象してきた、地域社会の動的な側面と地域の外部に開かれた柔軟なアイデンティティの発露が提示されるだろう。ただし、紙面の都合もあり、到底、米澤さんの生活史の全容を記すこと——それは本来的に不可能である——はできない。ここでは、彼の村の外での生活を中心に、聞き取りの中からいくつかのエピソードを拾い出してみることにする。

米澤家は、五十洲の中では西の端の方で願隆寺の隣に位置する。屋号をヨスケといい、村の中ではヨスケサと呼ぶことが多い。村には屋号にサがつく家が数件あるが、いずれもオヤッサマの家筋と考えられている。米澤孝次さんは、その米澤家の次男として昭和3年に五十洲で生まれた。長男は第二次大戦中に亡くなり、米澤さんが家督を継ぐことになる。

地元七浦の高等小学校を卒業した後、しばらくは地元の船に乗っていたが、戦争が始まると、徴兵検査を受け、戦争中は富山の連隊に所属していた。富山に配属になった夜に大きな空襲があり、防空壕に逃げ込むまでが大変だった。

戦後、米澤さんは五十洲に戻り、10年以上、漁師として過ごしていた。中心となるのは、4月の終わりから5月にかけてのイワシのさし網漁である。同じ五十洲の人たちに子方に来てもらって、漁を続けていたが、昭和30年を過ぎた頃からイワシが来なくなった。そこでイワシ船をおく（やめる）ことになり、昭和34年から愛媛に本社がある桑名海運という船会社に入り船員となる。当初から米澤さんは機関部に属していた。三等機関士から始まって、40代の後半で乙種機関長の試験に合格した。実は、機関長の試験に一度落ちている。最初の試験の時は、休暇をもらって、五十洲に戻っていた。当然、ほとんど勉強することはなく、試験を受けたところ、案の定、落ちてしまった。専務に呼び出され、もう外国航路の乗る舟まで決まっていたのにどうということだといってひどく怒られたという。

それで、今度は尾道にある海運学校に2ヶ月通い、機関部に関する勉強をしっかりとやった。余談だが、米澤さんが下宿していた家のすぐ近くには、志賀直哉が『暗夜行路』を書いた家が残っていたという。こうして、勉強して試験を受けて、無事、筆記の一次試験は合格した。ただ、米澤さんは電気関係を苦手にしていたので、それだけができなかった。それでも、一次にパスしたので、もう合格したも同然と思って面接に行くと、最初の質問から電気関係のことを聞かれたので閉口したという。これは、駄目かもしれないと心配していたが、しばらくして合格通知がやってきた。以後、昭和57（1982）年に船を下りるまで、アジアを中心とした航路で機関長を務めることになる。

機関長の仕事は、基本的には正午に点検して、機械の様子を確認すればいい。機関部は、メインエンジン部と補機と電気系統に分かれている。これらの各担当者が記す記録をチェックするのが、機関長の日課である。しかし、一度何か起きれば、全体の判断や責任は、機関長が負うことになる。そして、大抵の場合、各部門でどうしようもなくなってから、機関長のところへ報告が来る。各責任者にしても誇りがあるため、めったなことではうえには連絡せず、自分たちだけで対処するからである。それでも、多くの航海の中で、二度ほどメインエンジンが焼け付く事故があったという。

また、米澤さんは、ベトナム戦争中にサイゴンとダナンの間の物資を運ぶ船に乗ったことがある。

最初は、1年、次は半年間乗り、様々な物資を運んで往復していた。船が港に近づくと護衛船が付き、また、機雷など爆破物がないか調べてから船を下りることができた。

二度目のベトナムは、最初はシンガポールに行く予定だった。しかし、途中で会社からの指令があり、ベトナムに変更になったという。船員の中にはだまされたと言ってベトナムにつくと、すぐに飛行機で帰った人もいたほどである。それでも、手当がいいので仕事をしてしたが、この二度目のベトナムでは、攻撃を受けたことがあった。年末の休戦協定中のことである。米澤さんが船にいと、突然、機関銃の音がしてきた。退船命令が出たので、すぐに下りて港から離れたところに身を隠していた。時間を置いて様子を見に行くと、船は無事だったが、積み上げていた物資やドラム缶は、みんな燃えていたという。こんな所にいたんでは、命がいくつあっても足りないということで、二度と行かないことにしたという。

その頃は、ベトナムに荷物を送るのも大変だった。一度、奥さんの邦子さんが、ベトナムに小包を送ったときもかなり苦勞した。しかし、もっと大変だったのは、小包を受け取った米澤さんだった。小包を送ったのは1月、能登では寒の内、邦子さんは、冬用の靴下と地元で取れた岩海苔を送った。しかし、ベトナムは1月でも真夏の気候である。靴下は使いようがないし、海苔は暑さで赤く変色してしまっていたという。

現在、米澤さんは長く五十洲の漁業組合長を勤め、また、重油が流れ着いた1997年からは、五十洲地区の区長を勤めている。普段は奥さんの邦子さんと二人暮らしだが、一人娘が同じ門前町内に嫁いでおり、4人の孫娘ともども実家を訪れることも多い。米澤さんはこれまで、4艘の船を購入してきたが、船の名前は全て孫の名前をつけてきた。現在は、漁を中心としながら稲作を含めた農業に従事している。五十洲ではほとんど行われなくなったテンコ網という小型の定置網を扱えるひとりである。数年前まで、夏場は沖に出てタチウオ漁を中心に漁を行ってきた。こちらは沖へ200メートルぐらいの辺りに船を出し、疑似餌をつけたエダ針を100本前後、釣り糸に仕掛ける。海底が砂地になっているあたりをゆっくり移動しながら、タチウオがかかるように針の深さや船の速度を工夫する。しかし、現在では、タチウオが不漁のために先に述べたテンコ網やハチメ網を湾内でさすことが多くなっている。

以上のように、米澤さんの半生は、決して五十洲という村落に留まるものではなかった。戦後の大部分、日本が高度経済成長期と呼ばれた時代に彼は、船員として地元を離れ、その期間の多くは、日本さえ離れて生活していたのである。第二次大戦中に一兵卒として過ごした米澤さん、外国航路の機関長としての米澤さん、ベトナム戦争を目の当たりにした米澤さんは、民俗学的な枠組みからは——当然「民俗映像」においても——、収まりの悪いものではあった。だが、逆に言うなら、「奥能登」と表象され、慣習的な暮らしだけに生きているかにみえる人たちにこそ、日本の戦後を、さらにはその近代を知る重要な手がかりがあるかもしれないのである。

米澤さんを船員という職業に就かせた社会的な要因についても考えねばならない。それはイワシ漁の不漁による生計の逼迫という否定的な側面からだけ捉えるべきではない。確かにそのような側面の重大さは否定しない。しかし、困難な状況に柔軟に対応し、賃金の高い——その変わりに大きな危険も伴う——船員への道が、地域と都市にまたがるネットワークによって開かれていたことも

看過できない点である。そのような社会関係の広がりの中から地域社会とそこに生きる人々を捉えなおす視座が必要とされる。そして、彼が生活する地域社会こそが、近代日本の社会変動をその内側に折り込むようにして更新し、成層化してきた様相を、明らかにしなければならないのである。

いずれにせよ米澤さんを、単にレトリカルな「村の古老」として表象すべきではない。むしろ、彼の地域の外部での経験やそこで得た技能や知見、価値観を含みこんだうえで、彼の「現在」の生活を同時代に生きる先達者として描き出す方途が、求められている。例えば、外部の経験を折りこんだ主体性は、彼の「民俗知」についての説明の仕方にも現われている。このことを示唆している米澤さんのエッセイを次に紹介しておきたい。

『あいの風』『しかたの風』と言う言葉を目にし、耳にすることが多い。あいの風は南へ向かって吹き、高気圧の峰から吹き下ろすので夏は涼しく、冬は寒い。

くだりの風は低気圧の中心に向けて吹き込んでくる南よりの風であるが、ヤスクタリは、気象協会の言う東南東の風である。(中略)……同じイトジ山から発した、大瀧の南向きの斜面によって形成する、大きな谷あい(古くからカリマタ(狩股))と言ってきた。低気圧接近の予報が出ると、大瀧と中谷内の深い谷あい(カリマタ)を東南東の風が、イギスの集落目がけて駆け下り、皆月湾上を潮竜をあげて突っ走り、沖合へと吹き抜ける。この風がヤスクタリである[米澤 1996:7]。

五十洲<sup>いごす</sup>周辺の景観が目には浮かびそうな描写がなされ、地形の特質によって生じる風の推移が見事に捉えられている。米澤さんはこれに続けて、シカタの風の特質や時化への変化についても記しているが、それらの詳細な検討は別の機会に譲らなければならない。ここで注目したいのは、「高気圧の峰」や「気象協会の言う東南東の風」といった表現である。もちろん、「低気圧」や「高気圧」は、米澤さんが経験的、慣習的に培った知識ではなく、船員としての教育過程やより広範な情報環境の中で学び取ったであろうことは容易に想像がつく。このような異なる階梯にある知識が、漁師としての生活に必須のものとして選び出され、一つの整合的な語りとなっているのである。研究者が検証すべきは、多様な知識や情報が、どのような形で主体によって練り上げられ、生活実践において生かされているかということなのである。<sup>(10)</sup>

しかしながら、これまでの民俗学や民俗誌においては、もっぱら「土着」の知識のみが特権化され、現地の文脈から切り離されて収集の対象となってきた。能登半島の風の名称についても、各地域ごとの方位や名称のズレを指摘することはできるだろう。だが、そこからは、地域の中で有機的に結び合わされた「知」の重層性を再現することはできない。このような狭隘な姿勢が、性急な「民俗」の消滅を語らせるとともに、断片化された知識をつなぎあわせる修辞法<sup>レトリック</sup>を黙認することにもなったと言える。

#### ④……………映像メディアの受容と相互交渉の中の表象

これまでの節において、映像メディアの問題点とそこから捨象されてきた地域や主体に折り込まれた重層性についてみてきた。この節では、これまでの議論を踏まえたうえで、映像メディアの

「受容」の問題を議論していく。以下では、私自身が調査の中でなかば偶然に出くわした「受容」のあり方を報告するが、それらはアンケートなどによる統計的なデータとは質を異にする。そのような調査の必要性は認めるが、ここでの当面の目的とはかなりずれたものとなるため、あえて民俗誌的記述による「受容」の一端を報告していくことにする。

まず、興味深いのは、これまで紹介してきた米澤さん自身の番組についての評価である。これまでの説明とは一見矛盾するのだが、米澤さん自身は、この番組を肯定的に評価し、インタビュワーの橋口氏のことも「話するのが上手な人」と誉めていたのである。確かに番組の中でも「それ、むしろ、やっぱり海が気にかかってね、海しか仕事できんちゅう頭あるけんね」と語る米澤さんは、自身を海に生きる漁師としてアイデンティファイしていたとも言える。ここで重要な点は、米澤さんが番組のメッセージを、自らの生活に引きつけて捉え直していることである。紛れもなく、現在の生活の中で漁師という肩書は、彼の生活の現実である。修辞法を交えた民俗映像が、彼の生活実践に即して取り入れられているのである。

視点をかえるなら、米澤さんの周囲の人たちにとって、彼が長く船員を経験し、外国航路にもついていたことは——例え、その詳細な経験について知らなくとも——周知の事実である。そもそも、五十洲を含めた門前町は、米澤さんのような船員を多く輩出してきた。彼らのあいだでは、外国での寄港先やそこでの見聞、乗った船の規模や特徴、船内での各々の立場などは、かなり頻繁にやり取りされる話題であった。それらは日々営む漁と同じくらい現実的で、法事や祭りのような年中行事と同じくらい身近なものであった。このような中で、テレビでの位置づけが漁師としての側面を強調していても、不都合は生じないだろう。むしろ、それは何らかの機会——祭りの直会や寺の講の席、さらには招かれざる調査者の来訪——に話題を提供する素材となるのである。

米澤さんの奥さん、邦子さんも番組を肯定的に捉えていた。番組の中でも彼女は、五十洲での暮らしが大変なのは、という問いに「都会の生活、嫌ねー」と答えている。ただ、その邦子さんが気にしていたのは、インタビューの中で部屋の灯りが暗く、テレビ映りが良くなかったということである。ここでも番組のメッセージは受け流され、普段のテレビ番組との対照において、画像の良し悪し、あるいはその見やすさが話題となっていたのである。

番組のメッセージとその受容のずれは、撮影隊が五十洲を訪れていた当日にも感じたことである。番組で紹介された間垣が倒された家の方は、応急修理が済むと神社に戻り、直会に参加していた。そこでは、倒れた原因や修理費にいくらぐらいかかるといった話がひとしきりなされた。修理費に関しては、竹や支柱の木材費などで20万円はかかるだろうというのが一致した意見だった。

ところが、その話の合間に当の本人は、「これが、番組で紹介されたら、全国から義援金がきてしまうぞ」といって、笑いをとっていたのである。私には、20万円という修理費とありそうもない義援金の話に、笑うに笑えない気分だった。しかし、ここでの議論に照らし合わせれば、彼は番組自体のメッセージとは関係なく、番組の取材を自分の生活に引きつけて解釈しているのである。もちろん、彼が実際に義援金が送られてくると考えているわけではない。むしろ、そのような冗談を周囲の村人と言いつつ、自らの身に降ってかかった災難を対象化しているといえるだろう。

これらの事例が、いささか偶発的な「受容」のあり方の提示に留まることは否定しない。だが、同時にそれらは、あらかじめ一定の評価基準を定めたアンケートなどによっては得られないであら

うことも指摘しておかねばならない。アンケートなどにおける「受容」とは、すでに番組の内容をどう評価するかに限定されてしまっているからである。しかし、他の多くの知識や情報と同様に、人々は番組を——評論家や研究者のように——全体として検証したり、その表象技法を吟味するような見方はしていない。むしろ、それぞれの立場や状況に引きつけて、番組を自らの生活の一部に組み込んで理解していたのである。彼らは、いわばプリコラージュ的に映像メディアのイメージを切り取り、自らの嗜好にあわせて生活の中に嵌め込んでいると考えられる<sup>(12)</sup>。

このような状況を検証する際には、2節で論じた民俗映像についての価値判断的な態度は、一端留保する必要が出てくる。メディアによって仮構された地域社会の表象の一方で、地域の側でもメディアを客体化しつつ自らの生活に位置づけていた。むしろ、マスメディアと地域社会の側との相互的な交渉過程やそれらの重層性に注目する必要があるといえる。ここで、五十洲における番組の受容の問題から離れ、より今日的な状況を示している事例を紹介したい。それは五十洲の対岸に位置する七浦地区皆月の青年会のホームページに掲載されたコメントである。

しばらく更新作業も滞っていた「皆月青年会」でしたが、この度NHKの取材があったことをきっかけに久方ぶりの更新をすることができました。(中略)最初は皆月青年会の活動状況を現青年会員、元青年会員向けに情報発信していこうと思いホームページを立ち上げたわけですが、それに留まらず、「皆月」に興味を持つ人すべてに楽しんでもらえるようなホームページに模様替えしました。超過疎化の進むこの地区にまだこのような活動をしている若者がいて、またその活動を温かく見守っている年寄りがいるということを、ここへ訪れた方々に知ってもらいたいというのが最近のホームページ作りのテーマになってきているように思います。<sup>(13)</sup>

このホームページは、皆月の元青年会長である斯波安夫氏が、1998年に立ち上げたものであり、2000年2月29日現在、2272人が閲覧していた。ここでは、主に皆月青年会の活動として春、夏祭りの様子や、国の重要無形民俗文化財に指定されている「アマメハギ」の画像が、コメントとともに掲載されている。さらに、2000年の春からは、地元、日枝(日吉)神社の本殿改修工事の過程を報告する予定であるともいう。

ここで重要な点は、彼が2000年のNHKの取材に触発されて、新たにホームページを更新しようと思い立ったという点である。ここではマスメディアの取材活動自体が、地域における「民俗」への関心を促がしている側面を示唆している。同時に人々によるメディアの「受容」が、もはや送られてきた映像を享受するだけの一方向的なものでなく、情報やイメージを介した相互的な交渉過程であることも理解できる。

彼がここで示そうとするメッセージは、「超過疎化の進むこの地区にまだこのような活動をしている若者がいて、またその活動を温かく見守っている年寄りがいるということを、ここへ訪れた方々に知ってもらいたい(引用者注…原文では赤になっていた文字を太字の形で表現しておく)」という言葉に集約されている。この言明自体は、NHKなどで放映される映像と鋭く拮抗するわけではない。例えば、「過疎化に悩む村の伝統行事」といったコピーは、ニュース番組などにおいてほとんどステレオタイプ化しているからである。

だが、「伝統」や「伝承」と並行して語られる「過疎」は、ほとんど社会問題として主題化されないことは、今までみてきたとおりである。むしろ、そのような言明は、「伝統行事」の希少性——同時にそれを撮影したフィルムの価値——を強調している節さえ感じられる。けれども、ホームページでは、あえて「超過疎」といった諧謔的な表現を使うことで、地域社会の置かれた現状の厳しさを受け止め、客体化していると考えられるのである。

同様なマスメディアとのズレは、ホームページが紹介する「2000年のあまめはぎ」のコーナーにもみることができる。写真4は、全

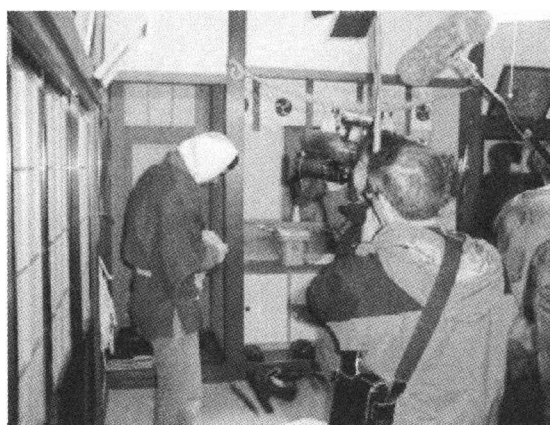


写真4 「2000年のあまめはぎ」より HPにも「手前がNHKの取材の方たち」と記されている。

部で27枚示されたアマメハギ画像の最初の1枚である。この写真の左側にはアマメハギの一人が立ち、出発前の準備をしている。その手前にはアマメハギを接写しようと近づくテレビカメラマンと音声のマイクが映し出されている。当然その背後には、この様子を撮影している斯波さんがたずんでいることになる。

この「地元の人」が、「マスメディアの肩越し」にのぞきみたアマメハギの像は、「民俗」がいかに重層化され、様々なメディアの中に幾重にも折りこまれているかを如実に示している<sup>(14)</sup>。だが、そのような現場を写し出すことで、この画像は、マスメディアが自らを隠蔽したうえで表象する「民俗」の現実を照射しているのである。このことはインターネットというメディアが、マスメディアの発するメッセージを巧みに流用しつつ、自己表象の場を模索する場となりうることを示唆している<sup>(15)</sup>。

「文化財」という制度的布置に絡め取られつつ、研究者からも静態的な「マレビト信仰」の図式にはめ込まれているアマメハギが、地域と外部、演者とメディア、他者表象と自己表象の相互的な作用、あるいは不断の交渉のもとにその「現在」を形作っているのである。

## おわりに

本稿はやや屈折した議論の展開を示してきた。それは1節で提起した問題自体が孕む重層性にも起因しているが、各々の節で提示した課題について、まとまった検討が行えなかったことも認めざるを得ない。以下では残された課題を整理しておき、新たなる議論の展開に備えたい。

まず、「民俗」とメディアとの錯綜する関係を俯瞰的に捉えなおす視座を構築する必要がある。すなわち、口承や文字、印刷物、電子メディア（映像メディア）などに分節化し、その特質や差異を検証する作業が行なわれねばならない。映像メディアの問題に限定しても、ようやくその対象の広がりや測定しえな過ぎない。これまでの議論では、マクルーハンが冷たいメディアと分類したテレビによる「民俗」の表象を中心に扱ってきた。しかし、今後は熱いメディアと位置づけられた



映画の表象についても視野に入れていかねばならない。例えば、姫田忠義や野田真吉といった映像作家が生み出したフィルムをどのように「読む」のかといった問題が再考されてしかるべきである。さらには、本稿でも少し触れておいた、新たなメディアによる地域社会の自己表象の問題も重要な検証課題となる。8ミリビデオやインターネットの利用によって、「民俗」が更なる展開を遂げることは間違いのないからである。

メディアを巡る議論は、民俗学において副次的に扱われるべきではない。むしろ、これらの議論を経て初めて民俗学は、主体と地域社会を確定し、それらについてのより豊かな表象が可能となるような記述の準拠枠に到達しえんと考えられる。そのような場では、多くの研究者によって多義的に用いられ、場合によっては批判の対象となる「伝承母体」や「ムラ」、さらには「民俗」そのものが再考と刷新の対象となるだろう。

「民俗」とメディアを巡る議論——民俗メディア論——は、今、端緒についたばかりである。

## 注

(1)——本稿は発表時に「フォークロリズム」という用語を用いて、メディアによって再表象される「民俗」の様態を検証していた。しかし、フォークロリズムという語自体の成立背景とその用法が多義的であるため、本稿では混乱を避けるために、この用語の使用は見送ることにした。しかし、今日の「民俗」のあり方を考えるとき、フォークロリズムが指示する範疇を無視することは不可能であるという認識にかわりはない。[Bendix 1988, 河野 1992, 八木 1998]を参照。

(2)——映像と民俗との関わりについては、映像民俗学の会によって編纂された論文集が参考になる[1998]。また、新谷尚紀は自らが携わった民俗映像を中心に、近年の民俗映像フィルムの動向についてまとめている[新谷 1999]。

(3)——本来なら、映像人類学の成果を中心に、欧米の研究動向を概観したいところであるが、紙面の都合もあり本稿では果たせなかった。これらの理論的進捗は、近年、注目すべき分野の一つであり、稿を改めて検証したい。

(4)——坪井はまた、同じ論文の中で、鶴見良行の議論を紹介しつつ[鶴見 1965]、家族アルバムの問題について言及している。写真もまた、視覚的な媒体として人々に大きな影響を与えてきたもののひとつである。それらは出版物を介して一般に普及する一方で、個々人が身近な生活や家族の姿、あるいは「民俗的なもの」を撮影する手段として用いられてきた。すでに海外ではポートレートなどの研究も盛んに行われているが、日本においては、まだ、ほとんど関心をもたれていないのが実情である。

(5)——しかし、海外の研究者による具体的な事例はすでに紹介されている。例えば、Martinezは国崎へのNHKドキュメンタリーの取材を通して、地域社会の側の論理とNHKの取材陣が表象する地域のズレを指摘し、前者への注視を促している[Martinez 1992]。

(6)——メディアに関する議論は、言うまでもなくマールシャル・マクルーハンによるメディア論[1986, 1987]が嚆矢となっている。吉見俊哉は、このマクルーハンやオング[1991]、ポスター[1991]らの議論を引用しつつ、メディアを4つの領域に分節化し、その政治的、社会的布置連関について説明を行っている[吉見 1996]。この図式は「民俗」の再生産過程を検証する際にも有益なモデルとなるだろう。

(7)——「ふるさとの伝承」は、1995年から1999年3月まで放映された後、各都道府県につき1話ずつが選出されてビデオ化されている。その解説を各地方の民俗研究者が担当し、監修を宮田登が担当するという形式をとっている。その中で宮田は「日本文化の特性を究明できる有力な材料がビデオに収録され今度のような形で再現されることはまことに喜ばしい限りである」[宮田監修 1997: 15]として映像による「伝承」の記録の重要性を訴えている。だが、このような映像メディアへの手放しの賞賛は到底受け入れることができないし、この種のリップサービスが、マスメディアによる「民俗」への介入を助長してきたことも否定できない。

(8)——なお、七浦地区の概観に関しては、私自身も関わった「七浦民俗誌」[七浦民俗編纂会編 1996]が編纂されている。ただし、この民俗誌の記述自体は、それに費やした労力と時間にもかかわらず、旧来の民俗誌の枠

組みを一歩も出ていない。もっとも、この編集に関わることによって、私自身はこれまでの民俗誌記述の限界を痛感したという点で、きわめて意義（異議？）深い経験であった。

(9)——断っておくが、私は「解釈」そのものを否定しない。しかし、まず必要なことは、研究者による解釈ではなく、地域の人々自身による「解釈」の諸相を見ていくことである。註10参照。

(10)——文化人類学者の中川敏は、次のような明快で示唆的な主張を行う。「人類学のモノグラフに『エンデ人の社会構造』という類の本があります。そこでなされるのは、エンデの社会構造の分析、説明です。私が言いたいのは、人類学者はそんなことをしてはならない。すべきことは、エンデの人が自分の社会構造を説明するそのしかた、それを分析するのだ、そのように私は思っているのです（引用者注…エンデは中川が現地調査を行った、東インドネシア、フローレンス島中部に住む民族のこと）」[中川 1992:133]。

(11)——もちろん、例外もある。地元を放映した番組をビデオに残し、その存在によって地域の「民俗」の真正性を主張する郷土史家などは、番組のメッセージに強く同調しているといえる。マスメディアのメッセージを受容する仕方は、地域内においても重層的なのである。これら問題については、Hallの「エンコーディング／デコーディング」のモデルが、きわめて示唆的であった。今日、カルチュラルスタディーズと総称される分野においては、メディアをめぐる文化の研究がきわめて盛んに行われている。その流行が例え一過性のものかもしれないにせよ、そこで対象化されている問題は、ポストモダンのとされる今日の状況を理解するうえで不可欠なもの

である。

(12)——本来、プリコラージュとは、レヴィ・ストロースが『野生の思考』において展開した議論であるが、それをより広義の文化の動態過程に適用したのは、ミシェル・ド・セルトーである[1987]。彼の議論は『日常生活におけるポイエティック』において詳しく議論されている。ただ、私自身はこの言葉を——また、ド・セルトーのいう「戦略」や「戦術」という概念も——一定の留保のもとに使用したいと考えている。それらが事象を説明するためのモデルではなく、単に名付けるために持ち出される側面を否定できないからである。

(13)——皆月青年会HP ([http://www.2.nsknet.or.jp/~cba/ama/ama2000\\_5.htm](http://www.2.nsknet.or.jp/~cba/ama/ama2000_5.htm)), 1999年, 2月16日更新。

(14)——クリフォード・ギアツは文化を象徴によって編まれたテキストと捉え、その「テキストの所有者の肩越しに文化を」みる者として文化人類学者を指定している[1987]。だが、「アマメハギ」の「テキストの所有者」とは一体誰なのだろうか。そして、研究者は誰の肩越しに何を見るべきなのだろうか。

(15)——これは、インターネットというメディアの特質による所が大きい。インターネットは既存のマスメディアとは異なり、情報の双方向的なやりとりができるうえ、個人による全国からのアクセスが可能である。これまで表象される側であった人々によって作成されたメッセージが、日本全国の人々に向けて発信され始めているといえるだろう。このことは、斯波氏が「『皆月』に興味を持つ人すべてに楽しんでもらえる」ようにホームページを更新したと記したことにより明確となる。ただし、メディアの双方向性が孕む陥穽については、吉見俊哉[1995]や水越伸[1996]が注意を促している。

## 引用文献

- オング, W. J. 1991[1982] 『声の文化と文字の文化』桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳, 藤原書店  
 河野 眞 1988 「フォークロリズムからみた今日の民俗文化」『三河民俗』3, 94~112  
 川村清志 1996 「『ふるさとの伝承』にみる表象の限界——映像化された「伝承」と映像化されない「現実」』『比較日本文化研究』3, 66~92  
 ギアツ, C. 1987[1973] 「ディーププレイ——バリの闘鶏に関する覚え書き」『文化の解釈学Ⅱ』吉田禎悟・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳, 岩波書店, 389~461  
 小林忠雄, 高桑守史 1973 『能登——寄り神と海の村』日本放送出版会  
 新谷尚紀 1999 「映像民俗誌論」国立歴史民族博物館編『民俗学の資料論』吉川弘文館, 75~109  
 七浦民俗編集会編 1996 『七浦民俗誌』七浦民俗誌編集会  
 セルトー, M. 1987[1980] 『日常実践のポエティック』山田登世子訳, 国文社  
 坪井洋文 1986 「故郷の精神誌」『日本民俗文化大系 12 現代と民俗——伝統の変容と再生』小学館, 267~308  
 鶴見良行 1965 「家族アルバムの原型」『思想の科学』34  
 中川 敏 1992 『異文化の語り方——あるいは猫好きのための人類学入門』世界思想社

- 
- ポスター, M. 1991[1990] 『情報様式論』室井尚・吉岡洋訳, 岩波書店  
宮田登監修 1997 『ふるさとの伝承解説編』示人社  
マクルーハン, M. 1987[1964] 『メディア論——人間拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳, みすず書房  
1986[1962] 『グーテンベルグの銀河系』森常治訳, みすず書房  
水越伸 1996 「情報化とメディアの可能的様態の行方」『メディアと情報化の社会学』, 岩波書店, 177~196  
八木康幸 1998 「祭りと踊りの地域文化」宮田登編『現代民俗学の視点3——民俗の思想』朝倉書店  
米澤孝次 1996 「『カリマタ』と『ヤスクタリ』」七浦小学校同窓会編『同窓会誌しつら』52, 6~7  
吉見俊哉 1995 「『声』の資本主義」講談社  
1996 「電子情報化とテクノロジーの政治学」『メディアと情報化の社会学』, 岩波書店, 7~46
- Bendix, R. 1988 *Folklorism: The Challenge of a Concept International Folklore Review*, 6, 5~15  
Hall, S. 1980 *Encoding/Decoding*. In *Culture, Media, language*. Hall, S. et al, eds. New York: Routledge 128-138.  
Martinez, D. P. 1992 *NHK comes to Kuzaki*. In Goodman, R and Refsing, K. eds. *Ideology and Practics in Modern Japan*. London: Routledge 153~170

(京都精華大学)

(2001年2月28日 審査終了受理)

---

## Representation of “Folkway” on Television and Reception by Represented People

KAWAMURA Kiyoshi

This paper aims to discuss the representation of “folkways” by the audiovisual media and to construct a point of view to help future discussion of media complex in “folk society”. There are four steps of procedure here.

First, in order to understand the complicated situation of “folkways”, it focuses on a television program which has collected materials on a festival and subsistence of a community. The paper verifies “folk material” represented in the program and it points out that the rhetoric of representation is alienated from the field. This illuminates how a local community which is supposed to have succeeded to “folkways”, is disposed in the midst of the modern media complex. Secondly, I interposes an objection to the fundamental view that regards a community as an independent individual system. This view has been shared with classical folklorists and mass media. Taking this into account, in order to suggest another viewpoint, the author pays attention to relation between local community and the outside which has been absent in the representation by media, and to the subjective flexibility in unifying all levels of activity which affect the community.

Thirdly, the issue of “reception” of such audiovisual media (including collection of materials) by represented people themselves is considered. “Reception” in this context does not mean an audience rating or general evaluation, as it presupposes coherence of the content of works and proposes to confirm how “accurately” the information is transmitted. But rather, the paper examines “reception” by focusing on how a program is enjoyed in one phase of life or evaluated on the level of daily conversation and casual talk. Finally, mutual negotiations between mass media and communities are discussed. “Folkways” are also being formed on internet sent from community side, and the community’s stratified relationship with mass media should be verified.

**key words:** audiovisual media, representation of “Folkway”, reception, negotiation, internet

---